

在外教育施設でのボランティア活動

前ニューヨーク日本人学校 教諭

北海道雨竜郡沼田町立沼田小学校 教諭 岡崎 正典

キーワード：ボランティア，日本語教室，国際学級

1. ボランティアについて

グリニッチタウンに住む日本人のボランティアに対する意識は高い。今から10年以上前、ここグリニッチに日本人学校が設立された時の地元住人の不安感や嫌悪感は容易に想像できる。そういった住人に対して、地域に貢献し地域からの信頼を得ることがとても大切であった。その先人の意思が今日にも脈々とつながっている。

我々教職員は、配偶者も含めてボランティアに積極的に参加している。配偶者は日系のボランティア団体に所属し、老人ホームの慰問や、折り紙教室など、様々なボランティア活動を行っている。教職員は、日系人会主催のイベントやボランティア団体のイベントの手伝いを行っている。以下では、その中で私が行ったボランティアをいくつか紹介する。

(1) 国際学級について

① 国際学級について

ニュージャージー補習授業校には、新国際学級というものがある。これは日本語や日本文化を学ぶことを希望する児童生徒を対象に、ニュージャージー補習授業校の授業日に合わせて毎週土曜日に行われる。内容は基本的な日本語や、日本文化についての学習である。

私は、この新国際学級で授業をする機会が与えられた。現地の学校で教育を受けている子どもたちと授業するのは初めてのことである。そこで感じた様々なことを述べていきたいと思う。



② 出会い

新国際学級で授業するまで、自分の中で、児童・生徒は、日本語がある程度通用すると思っていた。しかし、実際目の当たりにしたのは、日本語は挨拶程度、そして小学校低学年から、中学生ぐらいまでの幅広い年齢層で構成されている集団だった。

彼らにとって私が日本語で話しかけることが大きな学習の目的なのだが、ほとんどの子どもが私の日本語を理解できない状態である。それゆえ、日本語で私が話をしながら、担任の先生が通訳したり、私のつたない英語で学習をすすめていったりした。



また、先ほども述べたように集団に年齢の差がかなりあるので、学習教材の選定も難しかった。それでも、子どもたちは、これから私たちが提供する授業にとっても強い好奇心を示していたことが印象的だった。

③ 授業

授業はコマ遊びをメインにおこなった。日本の伝統的な遊びの一つでもあるし、小さい子も大きな子もある程度興味をもって取り組めると考えたからだ。予想通り、子どもたちは興味や関心を持って取り組み始めた。ひもの巻き方や回し方などは、簡単な日本語をゆっくり話し、あとは身振り手振りで教えた。慣れてくると、子どもたち同士で教えあい、チャイムが鳴っても、惜しむように取り組んでいた。その中で子どもたちが「先生」と呼びかけたり、「ありがとうございます。」と話しかけてきたりする姿が印象的であった。

④ 授業を終えて

はじめという点で、日本の学校教育とは大きく違ったという印象を持つ。日本では、まず姿勢を大切にし、姿勢が整うことで、学習に対する心構えもできるというものがあると思う。そういう意味では、彼らの姿勢は日本的に見ると決していいものではなかった。また、飲み物が常に机の上にあり、飲みたいときに飲むという形にも、少なからず驚いた。

しかし、いざ学習に入り、子どもたちの興味や関心を大切にしながら授業をすると、子どもたちはそれに応えた。その様子を見て、日本もアメリカの子どもたちも興味・関心をもった学習には意欲的に取り組むという点では同じ特性をもっていると思った。



(2) 日本語教室について

① はじめに

今年度はグリニッチタウンの生涯学習課（Greenwich Adult & Continuing Education）が主催する日本語教室のインストラクターとして活動する機会を与えられた。この日本語教室は1年間を2期に分けて行われる。私は10月からの第1期に参加した。コースは2コースあり、初級者コースと中級者コースに分かれていた。私が所属した中級者コースには4名の受講者がおり、ルネー、ニッキー、ジョン、アレクサンドリアであった。この4名と我々との日本語教室が始まった。この日本語教室は毎週水曜日の夜7時30分から9時30分までの時間で12月まで行われた。

② 受講者達の紹介

ルネー	保育園で働いている。肉食主義者。猫を10匹ほど飼っているらしい。動物が大好きで、その関係から動物がかわいそうで肉を食べることができなくなっらしい。日本の文化やひらがなに興味がある。
ニッキー	ルネーの娘。やはり肉食主義者、日本のアニメが大好き。将来は日本でグラフィックの勉強をしたい。そのために日本語の勉強をしようと思っている。
ジョン	音楽が大好きな高校生。自分でもバンドを組んでいるそう。日本の大学に進学の予定
アレクサンドリア	夫が日本人のコロンビア人。5歳の息子がおり、その息子の日本語教育のために自分も学習したいというのが動機

受講者全員明るく、そして向学心にあふれている。授業は毎回、受講者の日本語への質問に答えたり、こちらが用意した学習に意欲的に取り組んだりして、あっという間に2時間が経つ。

③ 実際の授業

実際の授業をどうすすめていったかという、オリエンテーションの時に、全員で「どのような学習をしているか。」についてディスカッションした。その中で明らかになってきたことが、以下の事項である。

- 支給されたテキストは我々にとって、Too formal (かたいイメージ、ビジネスで使う日本語が多い。)
- もっと生活に根ざした日本語を学習したい。
- ひらがなを使って、日本の本を読みたい。

そこで我々は、以下の3つを重点的に学習していくことにした。

- 我々がアメリカに来て困ったこと (英語でなんというのかわからない。) ことを日本で学習していく。
- 宿題として普段の生活から「これは日本語でなんというのだろう。」と思うものを英語で書いてきてもらい、そこから学習をふくらませていく。
- 低学年向けの読み物を用意して、ひらがなの習得に力を入れる。

④ 授業を終えて

10月から12月までの2ヶ月間の間には学習発表会もあり、正直に言うと非常に大変ではあった。しかし、その大変さに値するだけの価値もあったし、貴重な経験をさせてもらったと思っている。

受講者の人たちがそうであったが、正しい日本語を正しい文法で話そうと懸命になる。これは我々が英語を話そうとするときの感覚に非常に似ていると思った。私たちのつたない英語がどうして相手に伝わったかという、とにかく知っている単語を使い、聞き手はそこからイメージをふくらませていたからだ。

また、普段は意識していない日本語への発音、イントネーション、助詞の使い方なども自分自身が勉強になった。例えば「公園に行く。」と「公園へ行く。」では、どちらも意味は通じる。しかしアメリカ人には、「どうして、『に』でも、『へ』でもいいのか。」ということになる。方向を示す言葉は英語の場合「to」である。これを考えると「～へ行く。」という言い方が望ましいと思った。

また、我々がアメリカ人の英語を聞くとき、まず思うのが「速くてわからない。」ということである。そこで「ゆっくり話してください。」と伝えると。相手もゆっくり話してくれる。しかしそれでも速くて理解ができないという経験があったが、日本語教室でも我々がかなりゆっくり話しても相手に伝わらないということもあった。この経験から「ゆっくり話す。」ということはもっと聞き手を意識して、聞き手の立場になるという意識を強くもたないと伝わらないということたくさん経験できた。

受講者の4人は明るく、授業の合間にいろいろな話をするのができた。日米の文化の違いについて、日米の住所の表記について、子どものことや、プライベートなことまでいろいろな話をすることもできた。職場以外の方々と話すことによって、アメリカに、よりたくさん触れることができたと思う。

今後はこの体験を自分の中で、もっと整理していき、本校での教育活動に役立てていくことはもちろんのこと、帰国後の教育活動に生かしていきたいと思う。

2. 最後に

「海外で生活する子ども達のために日本と同等、いや、それ以上の教育を提供したい。」という志をもち、登録採用試験を受験してから4年以上の月日がたち、今こうやって報告書をまとめていることに、やっと職務を全うできたという思いがこみ上げてくる。

この3年間の研修で一番の財産となったことは素晴らしい職場の仲間と働くことができたことである。派遣年次の壁をこえ、「世界一の日本人学校を作ろう」をモットーとしてお互いに励まし合い、助け合い教育活動に専念する

ことができた。厳しい環境での3年間ではあったが、そういった仲間がいたからこそ乗り越えられたこともあるだろう。

また、学習指導・生徒指導においても全国各地から来られた先生方の様々な実践を見たり、体験したりして非常に勉強になった。

今、日本に戻り思うことは、以前にもまして子どもが好きになり、授業をすることが楽しくなったことである。これからも大好きな子ども達が喜んだり、楽しんだり、試行錯誤したりしながら学び合うことのできる授業を創っていきたいと考えている。